

戦後72年目の夏を迎えた。言うまでもないが、当時8歳の人は80歳となり、18歳の人は90歳となるわけだ。

2017年現在の8歳、18歳の日本人は、当時とは比較にならない情報量を得ているが、かといって72年後に今の政治や国際情勢を客観的に伝承できるかという大いに疑問である。誤解を恐れずに言えば、個別の知見や体験では、戦争の真理は見えてこない。

戦後日本では、終戦の日が近づくこの時期、「戦争を語り継ぐ」などという決まり文句で、ただただ感傷的な戦争否定だけを重ねてきた。

だが、個別の悲惨な体験だけを強調して、いくら戦争を語り継いだところで、戦争は抑止されない。個別の悲惨な体験は、その方々の人生において重く苦しい記憶ではあるが、そこにばかり焦点をあてても、戦争の起因や、停戦、講和の失敗の経緯は見えてこないからだ。戦争の検証というのは、善悪の評価を下すのではなく、同じ過ち（無条件降伏による敗戦と占領統治）を繰り返さないために、為されるものである。

「犯罪は悲惨である、悪いことだ。」と言い続けていけば、犯罪がなくなるわけではない。その抑止や防止のために多様な社会政策を実施しているからこそ、件数も減り、累犯も抑止できるわけだ。性善説に依拠し

『語り継ぐべき夏—戦争総括—』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

た理想や願望だけに抑止効果を期待するのは、社会として無責任極まりないと言える。

何故、非人道的核兵器により無辜の民間人20万人を虐殺された挙句、敗戦、占領統治という辛酸をなめるに至ったのか？少なくともそれ以前の100年の歴史、国際情勢の変遷と自国の安全保障を検証して、国家として総括レポートすべきなのだ。占領統治により主権を奪われた日本には、許さぬ総括だったが、72年経った今もなお、自国のメディアと怪しい空気により、戦争総括というテーマが歪められ、中国、韓国に必要以上に干渉される原因にもなっている。

国際社会の現実には、戦争に勝った国々こそ正義であり、核保有し、軍事力を強化してきた。彼らに拒否権のある国連ルールなど茶番であり、それによって五大国の罪がロンドンリングされ、侵略行為すらわずか数年で国際社会に呑み込まれてしまう。

語り継ぐべき「夏」を間違えたまま、わが国の安全保障は、国民から置き去りにされ、宙に浮いている。正当な戦争総括ができない限り、わが国の安全保障に未来はない。失敗の原因をしっかりと検証しないと、また同じ失敗を繰り返すのが、世の常である。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
「雲涯蒼天」
定価700円
Amazonにて販売中